「祈りがすべて」

エペソ人への手紙６：１８－２０

November.22.2026

エペソ人への手紙６：１８－２０（パワポ）

Preface

久しぶりのエペソ書となります。

これまで１年間ほどに渡って、「悪魔の策略に対して堅く立つことができるように、神のすべての武具を身に着けなさい」という６：１１からの内容について考えて参りました。

神様が備えて下さった６つの武具を身に着けることの大切さ、そして、その６つの武具の内容について学んで参りました。

神様が備えて下さった６つの武具は、正に完全全身武装です。

この６つの武具を身に着けて居さえすれば、恐いものなし、サタン悪魔の策略になんか飲み込まれることもなく、木っ端微塵にやっつける事が出来るほどのものであるかのように、ここまで使徒パウロ先生は熱く語って下さいました。

ところが、今日の聖書箇所エペソ書６：１８以降を見ますと、この神の６つの武具を身に着けてさえ居れば「もうそれで良し。万端整えられた」とは言っておられないように感じます。

むしろ、「どんなに神のすべての武具を身に着けたところで、これが無ければ何の意味もない」と言わんばかりに、拍車をかけて熱量を倍以上にしながら語っておられるように感じます。

即ち、祈りが無ければ、何にもならない。

祈りが無ければ、宝の持ち腐れ。

祈らないならば、神の武具は、骨董と化す。

祈りがすべて。

祈り、祈り、祈り、祈り、祈りと、５回も祈りという言葉を重ねながら、「祈りこそすべてです」と語っているようにしか感じません。

そして、問われているような気が致します。

「祈っていますか？」とです。

Part One

「神様が備えて下さった完全無欠な６つの武具を身に着けたとしても、祈りがなければ無と化す」ということを思い巡らしていますと、旧約聖書のダビデが思い出されました。

サムエル記第一１７章の場面ですが、イスラエルの初代王サウルに率いられたイスラエル軍が、ペリシテ軍と対峙したはいいものの、ペリシテの巨人ゴリアテが恐ろしくて微動だに出来ずに、正にその心境は袋小路にハマって逃げ場

を失ったねずみのような気持ちになっていました。
　そんな中、一人の少年ダビデが立ちます。
　「皆さんは、何を怯えているのですか？　生ける神の陣をそしるとは、ペリシテ人とは何者ですか？　あの巨人のために気落ちしてはなりません。私が戦いに出て行きましょう」と立つんです。
　ですが、当然ながら皆から、「なに馬鹿なことを言ってるんだ！この世間知らずが！」と怒られながら、たしなめられました。
　「それでも戦いに出て行く」と言うので、サウル王が、「そこまで言うなら、王である私の武具を、よろいかぶとを着けて行きなさい」と、ダビデに特別な王のよろいかぶとを身に着けさせてあげました。

　ところがです。
　王の武具を身に着けたダビデ少年は、「これは私には合いません。私に武具は必要ありません。羊飼いとして、羊を獅子や熊から守るために使い慣れた石投げと河原から取った石５つだけあれば、それで十分です」と、身に着けたよろいかぶとの全てを脱ぎ捨ててしまいました。
　そして、告白した言葉がこの言葉です。

サムエル記第一１７：４５－４７（パワポ）

　ダビデ少年は、主なる神様と繋がっていました。
　ダビデにとって頼りになるのは、道具でもなく、武器でもなく、規模や大きさでもなく、方法でもなく、人でもなく、当然お金でもなく、主なる神様でした。
　万軍の主と繋がること、つまり主に祈ること、その祈りに応えて下さる主なる神様のみが、ダビデにとって唯一頼りになる盤石な岩でした。

　パウロ先生が、「神の備えて下さった６つの武具を身に着けたところで、祈りがないならば、何にもならない」と言っておられるその内容を思い巡らした時、この少年ダビデの姿が思い浮かんで来ました。
　即ち、祈りとは、神様と繋がることです。
　神と繋がることを大切にすること、神と繋がることを何よりも第一にすること、イエス様と繋がることを優先順位の真っ先に持ってくること、聖霊様と繋がることがどんな現実よりも現実であること、もしそれがないならば、どんなに素晴らしい武具を身に着けたところで、それが力を発することはない。
　逆に、ダビデのように、神に祈る、神に繋がる、神というお方が自分にとってどんな現実よりも現実であり続けるならば、たった５つの石ころでも、そこに神の御業が現れるということをダビデも、パウロ先生も身をもって教えて下さっているように思うのです。

そこで、翻って考えることは、「私たちは祈っているだろうか」ということです。

イエス様は、「私の父の家は祈りの家である。なのに、あなたたちは、ここをお金を稼ぐための強盗の巣にしてしまった」と仰ったことがありますが、この土浦めぐみ教会が、四事業を含めた教会すべての働きと活動が、祈りによって始まり、祈りによって進み、祈りによって求め、祈りによって語り、祈りによって関わり、祈りによって与えられる、一人一人が神に繋がる続ける祈りによる信仰共同体、礼拝共同体、祈りの共同体であることを願わずにはいられませんし、そうであるよう祈らせて頂いておりますが、では果たして、私たちはどれ程に、「祈りがすべてだ」と思いながら生きているでしょうか？

「祈り、まあいいよ。でもね、祈る前にまだやることがあるでしょ？」と思ってはいないだろうか。

「祈ったところで何になるの？」と思ってはいないだろうか。

「祈る時間があったら、もっと他にやるべきことがあるでしょ」と思ってはいないだろうか。

「祈ったって、結局やるのは私たちでしょ」と思ってはいないでしょうか。

「祈ったって、たかが知れているよ」と思ってはいないでしょうか。

または、「祈ることしか出来ないからね。聖書を読むことぐらいしか出来ないからね」なんていう言葉を口にしながら、神様の前にあってこれほど失礼な言葉はないということにも気付かずに、神様を実のところ信じていないことになってしまっている発言だということにも気付かずに、信じている風、祈っている風ではいないだろうか。

「祈ることしか出来ないからね」なんてことを思い、神様を偶像扱いしながら、ともにおられる神様を、インマヌエルと呼ばれるイエス様を無きものにしてはいないだろうか。

果たして私たちは、使徒パウロ先生の熱量をもって、「祈りがすべてだ」と思えているでしょうか。

こんなことを考えていますと、「私たちに起こる、または降りかかるあらゆる問題、経済的に苦しいとか、精神的につらいとか、環境が良くないとか、思い通りにいかないとか、体が悪いとかのあらゆる問題は、『祈りがすべてだ』ということに中々気付けない、気付こうとしない私たちに、『何としてでも、祈りがすべてである』ということを体験させてたくて、祈らせてたくて、神との対話を持つことの比類なき恵み、祝福、特権、満たし、心地よさ、そして、これ以上確かなことはないということを実感できるように与えて下さっているものではないだろうか」と思えてきました。

「首を長くして、神様は私たちの祈りを待っておられ、神と対話し応答し合う関係、神様に繋がり続けることがすべてであることを知ってもらいために、私たちに降りかかるありとあらゆる問題は、存在しているのではないだろうか」

と思えてきました。
私たちに起こるあらゆる問題を用いて、神様との対話を促す、神様に心を吐露する、そして、神様の御声に耳を傾けることの大切さを教え学ばせようとしておられるように思えて来ました。

Part Two

今、このエペソ書を書いている使徒パウロ先生が直面している外見的に最も大きな問題は、イエス・キリストを、イエス・キリストの愛と救いを宣べ伝えたことゆえに捕らえられ、牢獄に入れられ、囚人となっていることです。

そして、そんなパウロ先生のために祈る、普通に考えられる祈祷課題は、その牢獄生活からの解放だと思いますが、パウロ先生は、ここで一言も、「牢獄生活からの解放を祈って欲しい」とは口にしておられません。
むしろ、その逆で、エペソ書６：１９，２０を見ますと、

エペソ人への手紙６：２０（パワポ）

この前の１９節でも、

エペソ人への手紙６：１９（パワポ）

と、イエス・キリストを宣べ伝えるために囚人となっていることはチャンスであり、望んでいたことであり、折にかなった働きなんだと言わんばかりです。

このパウロ先生の手紙を受け取ったエペソ教会の人々は、当然のようにパウロ先生の一日も早い赦免と釈放を願い祈るはずですが、パウロ先生がそんな彼らに願っている祈りは、そのような内容の祈りではありませんでした。
今置かれている問題の表面的なことではなく、深層を、もっと奥深くに隠されている神の宝のような導き、神が与えて下さっているチャンスについて祈って欲しいと、１８節では「御霊によって祈りなさい」と促しておられます。

「あなたの思い、あなたの考え、あなたの願い、あなたがイメージする問題解決を祈るのではなく、その状況の核心にある深い神様の御心を探りながら、そこにも神様の御業が働いていることを覚えながら、神様が望んでおられることが、神様が望んでおられるように進むよう祈りなさい」と、「祈って下さい」と、「どんなときにも御霊によって祈りなさい」と語りかけておられます。

２０００年前の中東・ヨーロッパ世界の覇者はローマ帝国でありましたが、すべての道はローマに通ずると言われるぐらいにローマは世界の中心であり、経済も、政治も、娯楽も、芸術も、あらゆるものがローマに通じていました。
そんなローマ帝国の覇権を握る人物が、皇帝カエサルです。

その皇帝カエサルの前に出て行って、なぜ自分がこうして捕まっているのかの罪状を述べる、つまり、どのようにイエス・キリストに出会い、どのようにイエス・キリストを信じる者とされ、どのようにイエス・キリストを宣べ伝える使徒となって、どのように、イエス・キリストの何を伝えているがために、囚人として捕らえられたのかという、正に、福音を誰の目も気にせず、誰からも妨害されることなく、公に、堂々と、世界の覇権者カエサルに宣べ伝えることが出来る。

イエス・キリストの福音を、最も効率的に、最も確かに、世界の中心であるローマ帝国の中枢に宣べ伝える方法が、囚人となって皇帝の前に引かれていくことであるというのを、パウロ先生は、イエスの御霊、聖霊なる神様によって示されていました。

使徒の働き１６章を見ますと、パウロ先生の民族的アイデンティティーはヨーロッパ人ではなく、アジア人であったためでしょうか、当然のようにアジアの人々に向けて福音を宣べ伝えようと、アジア方面に向けて宣教旅行を進めようとするのですが、イエスの御霊がそれを禁じ、ヨーロッパの方、つまりローマの方に向かって行き、ヨーロッパで福音を宣べ伝えるよう促されているのが記録されています。

使徒の働き１６：６－１０（パワポ）

アジア方面に進もうとしたパウロ一団を、マケドニア、つまりヨーロッパ・ローマ方面へと進んでいくよう聖霊が、イエスの御霊が導いて行かれました。

このようにして、福音が、アジア方面ではなく、ヨーロッパの方から宣べ伝えられたことによって、イエス・キリストの福音が全世界に宣べ伝えられるのに、３００年から４００年程早くなったと言われています。

パウロ先生は、今、目の前にある問題を前にして、単純に私たち人間の願いばかりを神様に祈るのではなく（もちろん、私たちのすべての願いを神様に祈っていいんですよ）、でも、それ以上に、「その問題の中に隠されている神様の宝のような御心を探ることが出来るように、求めることが出来るように、聖霊なる神様の促しに、心の耳を、たましいの耳を傾けるよう祈りなさい」と教えて下さいます。

私たちが直面している物事には、神様の深い御心がある。

その御心を探ることを最も大切にしながら祈ることを、今、使徒パウロ先生は、エペソ教会のこの手紙の受け取り手たちに教えて下さっていると同時に、今これを読んでいる私たちにも教えて下さっております。

ローマ８：２６に、

ローマ人への手紙８：２６（パワポ）

と言っていますように、御霊なる神様は、私たちの祈りを導いて下さいます。

「導きたい」と思っておられます。

私たちが、私たちの願いや望みや希望ばかりに集中し、目を閉ざし、耳を閉ざし、心を閉ざして、御霊が導いて下さる祈りを口にすることを拒まないようにするならば、神の御心を、私たちは祈ることが出来るでしょう。

そして、「そのように導きたい」と思っておられる方が、聖霊なる神様です。

Part Three

今パウロ先生は、「ローマ皇帝に、また全世界に影響を与える力を持つローマ市民たちに、イエス・キリストの福音を自由に宣べ伝えることの出来るこの囚人という立場からの解放を祈るのではなく、その囚人という環境状況を最大限生かしながら、人の目から見たら一番最悪の状況のようにも見える、正にそこが神の最善であることを覚え続けられるように、覚え続けながら神の御旨を堂々と成すことが出来るように、神の御言葉を怖気付くことなく大胆に語り知らせることが出来るように、イエス・キリストを宣べ伝える証人としての生き方を全う出来るように、目を覚まして、忍耐の限りを尽くし、御霊によって祈って欲しい」と懇願しています。

「決して、安易に、牢獄からの解放を祈ってくれるな」とお願いしているようにも思えます。

「四面楚歌、八方塞がりの状況の中にあって、横ばかりを、人ばかりを、条件ばかりを見るのではなく、上を見なさい。神を見なさい。神に繋がりなさい」と、教えて下さっています。

コロサイ書３：１でも、「上にあるものを求めなさい。上にあるものを思いなさい。キリストが神の右の座に着いておられます。地にあるものを思ってはなりません」と仰っていますが、「孤立無援、万事休す、手詰まりというような中でも、いやむしろそんな時こそ、上を見上げることを思い出し、上におられるキリストを見上げることが出来る。上を見上げて祈ることこそが最善であり、最高であり、唯一無二の最も確実な方法であることを覚えなさい」と、教えて下さっているように感じます。

皆さんはいかがでしょうか？

Conclusion

こういうわけですので、祈りましょう。

祈りませんか。

なぜ、パウロ先生がこんなにも、祈り、祈り、祈り、祈り、祈りと５回も重ねながら、私たちに問いかけておられるのかを思い巡らしながら、実際に、「主よ。イエス様。聖霊様」と祈りませんか。

ダビデがそうであったように、またパウロ先生がそうであったように、そして、エペソ人への手紙の受け取り手であるエペソ教会の人々が祈ったように、御霊によって、神の御心を探る祈りを献げませんか。

私自身、この説教を準備する中で祈っていますと、「御霊によって祈れていないなあ」と思わされました。

「自分の思いが先行し、自分の考えが先行し、自分の恐れが先立ち、自分の我や正義が前に出て、中々御霊なる神様の促しを聞こうとしない頑固さが、自分の中に巣食っている」と感じずにはいられませんでした。

だからもっと、「『聖霊なる神様、私の祈りをお導き下さい。聖霊様、神の御心を祈らせて下さい』と祈らなければ」と、思わされました。

ともに、あらゆる問題の表面の事ばかりを祈るのではなく、その奥深くにある宝のような神の御心を探り求める祈りを献げようではありませんか。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ６：１８